

7

イセリア 英雄戦記

the legend of the Azeria war

編集 二次元ドリームマガジン編集部

挿絵 牡丹

立ち読み版



第25話

淫祇邪教の淫らな謀略

本文担当…木森山水道

007

第26話

覚醒する魔眼姫

本文担当…あらおし悠

065

第27話

火の王女と砂の王子

本文担当…大熊狸喜

117

第28話

目覚める魔王

本文担当…火村龍

173

Bonus Track

227

登場人物紹介

Characters



セリーヌ＝アヴァリアレス

イセリア英雄国の騎士。外交も任せられ、王女からは絶大な信頼を与えている。お菓子作りが趣味という可愛らしい一面も。



フィオナ＝プリティッシュ

イセリア英雄国の王女。少し世間知らずなところがあるが、幼馴染みのセリーヌのことをとても大切に想っている。



アリオナ＝プリティッシュ

イセリア英雄国の現女王であり、フィオナの母親。メイズの瘴気にあてられていたため、病に臥せていた。



エルズ＝^{マイハ}M＝アムデルト

イセリアの第三騎士団団長を務める貴族令嬢。聖なる槍〈セルフェザー〉と特殊能力〈マイハ反応〉を使う。



ミーシャ＝フルナクト

「淫祇邪教」の調査でバードベルグに潜入していた猫耳の少女剣士。実はイセリア英雄国の大騎士団長である。



ドーラ＝ウォールドラゴン

イセリア英雄国の先代大騎士団長。宝剣アフロディーテを持ち、「女王の盾」の異名を持っていたが、今は淫祇邪教に捕まり……!?



メイベルローゼ＝オーギュスタン

バードベルグ帝国の皇帝ギュスターヴの末姫。あらゆる者の意識はそのままに、肉体を思うままに操れる「服従魔眼」を持つ。



ヒツギ 氷継

フェイエン王家に仕える女執事。アイマスクをつけているが、気の流れを読み取る「心眼」で外界の状況を察している。



ビヤクレイ 白麗

フェイエン武踏会の王女。外交のために国外に出ており、グラマトン聖教会の襲撃から逃れることができた。武芸にも秀でており、「火の白麗」の通り名を持つ。



スレア＝エターム

メイズⅦ内でアリオナとエルズが出会った、最上級の「魔導具」を作る錬金術師。しかしその正体は……!?



エバ＝ファルケ＝グラマトン

グラマトンの聖女のひとり。淫祇邪教に傾倒しており、ある目的のために父親である法王を洗脳し、グラマトン聖教会を裏から操っていた。淫祇邪教では巫女という地位にいる。



シフォン＝アビゲート

元イセリア第六騎士団の団長だったが、魔物の血を引いていたため追放され、イセリアに復讐を誓う。

残忍な笑みを浮かべる、半裸のシスター。脅しても何でもない。この女は本気だ。強気から一転、メイベルローゼは蒼白となった。

「やめる！ やめてお願い！ 何でもするから！」

イーバを失ってしまう。その恐怖が心にもないことを口走らせた。

「へえ……何でも？」

シフォンとスレアが目配せする。かと思った瞬間、髪から変化した蛇が空中を這うように伸びた。よける間もない素早い動きで、メイベルローゼとミーシャの喉に鋭い牙を突き立てる。

「し、しまった——!？」

ドクドクと、頸動脈から体内に何かを流し込まれる生々しい感触。毒を打たれたショックで、力が抜けた。身体が熱い。呼吸が荒くなり、心臓が早鐘のように鼓動を打ちまくる。全身を襲う異常に、死を覚悟するメイベルローゼ。だが、次第におかしな感覚が身体中を包み始めた。

「あ……あ……？」

下腹辺りが、切なく疼く。息は荒いが苦しくはなく、それどころか熱いため息を漏らししてしまう。

ミーシャも同じ感覚に苛まれているのか、スカートの下でモジモジと内腿を擦りあわせていた。

「こ、これは……私に何を……ン！」

ニヤニヤと笑うシフオンの目が、なぜか頭の芯を痺れさせる。寒気にも似た疼きに耐えかね、震える背筋を反らせると、服に擦れた胸の先端から、甘美な電流が走った。

「ひゅっ……あふああんっ！」

鼻にかかった艶声は、自分のものとは思えない。乳首が勃起して、敏感になっている。

「こ、これは……何で……」

「私の蛇は、女を気持ちよくしてくれるの。ふふっ……どう？ 欲しくてたまらないでしょう」

「ば……馬鹿な……あっ！」

毒とは媚薬だったのか。並んで嘲笑するスレアとシフオンに挑みかかろうとして、膝が崩れた。その身体を、逞しい手が支えてくれる。

だがそれは、メイベルローゼを助けるためではなかった。

「——！」

眼前に突きつけられた醜い肉塊。オークが剥き出しの下半身を顔に擦りつけてきたのだ。

「んふ。オークも女の欲情を嗅ぎ取ったようですね。ほらあ、よくご覧なさいませ。とっつても逞しい勃起♪」

「やめろ！ 汚いものを見せるな！」

押し返そうとしたメイベルローゼの鼻孔を、魔物の匂いが刺激した。気を失いそうにな

るほどの、耐え難い悪臭。なのにそれを嗅いだ途端、瞳の色と思考が、どろりと爛れた。

「あ……はあ……」

呆けて開いた口の中に、臭気が充満する。股間が熱く疼いて、地面にぺたんとついたお尻をくねらせてしまう。

（どうして……私、これが……）

欲しい。この汚らしくて醜い肉塊が欲しくてたまらない。気づくとメイベルローゼは、まるで誘い込まれるようにオークのペニスを口に含んだ。

「ん……ん……ん……」

顔を傾け、喉の奥までずりりと捻じ込む。自分の手首ほどはあろうかという太肉柱。ごつごつとした血管と、吐き気を催す匂いを味わうように、夢中になって舌を絡めた。

（私、何をして……でも、ああ！）

止められない。大きく張ったカリ首や裏筋に、ねっとり舌を這わせる。そして再び口に含んで、唇に触れる肉棒の感触を楽しんでしまう。

——ちゆる、ちゅば……ちゅぶぶ！

「ふぶぶおおお！」

ひと舐めごとに熱を帯びる舌に、魔物のペニスも悦びで身を震わせた。ピクピク引き攣りながら硬直度を増し、先走り液を口腔内に撒き散らす。

「んぐう！」

そのあまりの青臭さに胃液が込み上げる。だが、媚薬に侵された身体は肉棒にすり寄り、口を離そうとしない。

「ふぐう！ むふうう!!」

「おおおお、おがあああ!」

口唇奉仕に興奮したオークはメイベルローゼの髪を掴み、喉奥にまで剛直を突き立ててきた。頭も振られて息苦しくなるが、今は強引で乱暴な抽送すら悦びに感じてしまう。

「グフっ、俺たちのモノもダ」

左右から別のオークが歩み寄り、涎を垂らす亀頭を頬に押しつけた。あまりの無礼に腹が立つ。なのに感情とは裏腹に、杭のような勃起肉棒を、指が食い込むほどしっかりと握りしめた。

（硬い……）

まるで鋼のようだ。表面に浮かんで脈打つ血管。手指にぬるぬる絡みつく先走り粘液。その感触と匂いに頭の芯がカツと熱くなり、最初から最速フルストロークで魔物に手淫奉仕する。

「ぐふふふう、いいゾ！ もつと強くだ！ ぶふおおっ！」

魔物どもが満足そうに嘲り笑う。メイベルローゼは力なく頷いて、唇と両手を必死になつて動かした。

（くそっ！ どうしてこの私が、こんな目に遭わなくちゃいけないの!?!）

情けなくて悔しくて、ポロポロと涙が零れる。それでも、身体を炙る欲情の炎が、隙あらば理性を霞ませようとした。媚薬のせいとわかつていても、股間を搔き毟りたくなる。ペニスから離すことのできない唇が、オークを絶頂に向けて昂らせてしまう。

「やめるにや……やめ、んぶう！」

視界の端で、ミーシャも口唇愛撫を強要されていた。小さな口にオークの性器は巨大すぎて、ほとんど先端しか啜えられない。

「うみやああ……んぶ、じゅぶぶ、んばっ……ちゅぶぶぶぼっ！」

プライドの高い彼女には、さぞかし屈辱的な行為のはず。なのに自ら頭を振って肉柱に奉仕する。いや、求めずにいられないほど、心も身体も媚薬に侵されているのだ。

「はあ……ちゅ、ちゅば。れろれろ、じゅぶりゅっ！」

メイベルローゼも負けじとペニスに奉仕した。首を揺らしながら鈴口に吸いつき、舌先でくすぐる。そして奥まで啜え込み、肉幹を唇に擦りつける。

(ああ……熱い……)

お腹の奥が、子宮が熱く疼いてたまらない。いつしか思考は完全に濁り、股間から流れ落ちた恥液が、太腿をねつとりと卑猥に濡らす。

口と手に吸いつく剛直からも、生臭い汁が滲み出た。絶頂が近いことを本能的に悟ったメイベルローゼは、三本の肉幹から漏れる樹液を、じゅるじゅると音を立てて交互に啜り上げた。



体重を乗せた一撃で、子宮壁が強く叩かれた。

その瞬間、青髪騎士の脳裏が眩く白光。肢体が跳ねて、性絶頂へと叩き上げられた。

「イイっ——イくうううっ——んっあっあああっ——奥まで犯されてへええっ——イってしまふううううっ!!」

卑しい強姦魔たちに見下されながら、恥ずかしい告白の中、犯されたセリーヌは拘束肢体を痙攣させる。

白いヒップと豊かな乳房がプルルつと弾み、乳首もキュウ…と赤く硬化。

ピアスのシンボルが赤く輝くと、犯される女体はさらに、異種姦による性快楽へと染め堕とされてゆく。

同時に、隣で犯されるシェリルも、恥辱の頂点へと上げられていた。

「ヒクヒヨおおおっ——イかされっ——イかひやれるううあああああっ!!」

健康的な肌を震わせて、女戦士はレイプ絶頂を迎えさせられる。

下向きで質量を増した巨乳がタプルつと揺れてシンボルが輝き、大きなヒップが恥ずかしそうに震えた。

ふたりの姦女は、牡魔獣たちの射精を同時に味わわされる。

「あのセリーヌに、ナカダしいっ!」

——ツドプびユリユリゆるりゆるるりゆるるっ、ドぶユるルくくくッ!!
セリーヌの子宮粘膜が、粘度の高い強姦魔の精液で満たされる。



絶句するミーシャに、解放されたアリオナは明らかな牝豚の表情を浮かべよろよろと歩み寄ると、膝を折って騎士に視線を合わせた。

「ああ、ミーシャ……」

アリオナの、濡れた大きな瞳がミーシャを覗き込む。やはり、何かがおかしい。ミーシャは咄嗟に、アリオナから距離を取ろうとしたが、

「ア、アリオ……んちゅうっ!!」

迫るアリオナはミーシャを抱き寄せ、ぬらぬらとエロティックに濡れた唇を、ミーシャの唇に押しつけてきた。ミーシャは驚き目を見開き、「んーっ、んんーっ!」と抵抗するも、力が抜けた身体は、戦士でもないアリオナの力にすら太刀打ちできなかつた。

「アリオナ、ひやめっ! にやあつ、アアッ、んちゅう、れる、じゆるっ」

アリオナの唇が、ミーシャの唇を押しつけ、舌を挿れてくる。しなやかな女王の指がミーシャの乳首をつまみ、「ひにやつ」と声をあげた瞬間に、口内を蹂躪された。暖かなアリオナの舌がミーシャの舌に絡みつき、吸い込み、しゃぶり尽くす。

「はへええええ……。あ、ありおな……。なにをお……」

「ウフフ。ミーシャ……一緒に気持ちよくなりましょう?」

ようやく唇が離れ、アリオナとミーシャの間に唾液が糸を引く。ミーシャの顔は淫らに蕩け、勇ましい騎士の瞳がうるうる潤んでいた。アリオナの唾液、唇、キス……それらすべてから発せられる淫気と、メイベルに吸われた力、デイルドーによる恥辱責めによつ

て、最強の大騎士団長はイヤらしく発情してしまっていた。

「う、うううつ。そんな、アリオナまで……。はにやあああ、やめるおおお」

「こんなにオマンコを濡らして……。ミーシャ、あなたにも、オチンポをハメてもらおう悦びを教えてあげる……」

「ア、アリオナ、目を覚ますにや……。あああ、乳首弄るのらめえええ」

ミーシャは、潤んだ瞳に悔しそうな色を滲ませ唇を噛むも、エッチに乱れた身体はもうどうしようもなかった。

「クク、イセリアの女王も騎士も墮ちたものだな」「責められて悦んでるぜ」

私たちの言葉がミーシャを辱め、被虐の悦びに身体が反応してしまう。

そして、アリオナはさらに絶望的な台詞を、性の悦びに飲まれた牝豚の表情で放つ。

「さあ、皆さん。私たちを辱めてください」

アリオナは背後に控える男たちに呼びかけ、巨尻を扇情的に揺らし、ぐっしりと濡れそぼち愛液を漏らす秘部を見せつける。その言葉に、溢れる牝の色気にペニスをギンギンに勃起させていた牝は、我先にふたりへ殺到した。

「あひいっ！ くるにやああっ！ ああっ！ んぶううっ!？」

「騎士様の口は具合がいいな。見ろよ、マンコも開ききってるぜ」

ミーシャの悲鳴が男たち、そして女王の爆乳に飲まれる。抵抗しようとしたミーシャの口に肉棒が入り込み、スペルマの匂いが鼻をつく。

「ミーシャのおマンコ、こんなにパクパクして……。欲しいんでしょう？ 私と一緒に気持ちよくなりましょう。皆さん、この淫らな牝豚に、オチンポをぶち込んでください」

「んひいっ！ アリオナ、正気に戻ってえええっ!!」

アリオナの繊細な指先が、ミーシャの膣口をなぞり、ラビアに爪を立てた。ミーシャは何度も正気に戻ってと叫ぶが、その顔はすでに悦楽に塗れ蕩けていた。快楽と騎士の誇りの間で揺れるミーシャの表情は男たちを興奮させ、さらに責めを激しくさせる。

アリオナは、豊満な肢体を揺らし、媚肉を震わせ、勃起乳首をミーシャの乳首に押しつけグニグニとこね回す。熟れた身体をイヤというほど開発し尽くされた女王は、淫らな牝豚に堕ちてしまっているのだ。

「クッ、エロすぎる……」「もう我慢できねえ！」

そんなふたりの牝穴に、ガチガチに硬くなった牝の肉棒が触れる。ミーシャが叫ぶ間も、アリオナが歓喜に震える間もなく、それらは一気にふたりの膣内に突き入れられた。

ズボオオツツ!! ぐじゅっ、じゅぶぶううっ!!

「はにやあああああつっ!!」「んほおおおおおつっ!!」

同時に淫らな嬌声をあげ、ブルブルと悶える女王と騎士。ミーシャの眼前で、アリオナが髪を乱して絶叫し、無様なアへ顔を晒してイキ狂っている。

「ミーシャ! みーしゃあああつ! い、いいわっ、感じるうっ!! ミーシャも一緒に感じてえっ!! 皆さん、もっと辱めてください、アリオナを、淫らで無様な牝豚を、もっと

虐めてええっ!!」

「あひいっ! アリオナ動かにはいれええっ! 乳首こしゅれへっ! 今敏感しゅぎるからあっ!!」

肉同士がぶつかりあう音が響く。アリオナとミーシャ、そして男たち。淫らな乱交に部屋の中に熱気が満ちる。小さな身体に挿入されるペニスは苦しく、しかし膣壁を抉る快楽は凄まじい。唇を噛み、抵抗を続けるミーシャ。アリオナも牝豚へと堕ちている今、自分がしつかりするしかない――!

「負けにやひいっ! れ、れったい、アリオナをとりもろしゅ……!!」

「アハハ!! 大騎士団長が情けないわね! 何よそのトロ顔!!」

ミーシャの、呂律の回らない決意の言葉に被せるように、メイベルローゼの哄笑こしょうが響き渡った。どれだけ気丈に振る舞おうとしても、自分の中の女が、膣を突き上げる牡の肉棒に反応してしまう。敏感すぎる身体は、騎士の意思すらねじまげて快楽を求めていく。必死に我慢しても、いつの間にかミーシャの腰は男を感じさせるように動いていた。

「ああっ! ミーシャ、わかるわ。もうイキそうなのね!! そんなに腰を振って……んひっ! くほおおっ!! オチンポ気持ちいいのおっ!! わ、私ももうすぐイけそうですっ! もっと激しく突いてっ!!」

「そ、そんなことにや……んひいっ! アアッ! ダメ、アリオナ、われもうらめっ!! あっ、あああっ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ？



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※「二次元ドリームノベルズ」は18歳未満の方は購入できません

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラブ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの公式サイトにて！

キルタイム

検索

Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

